

大地震両川口津浪記石碑

西長堀の大阪市立中央図書館に行く前、大正橋まで足をのびした。写真上は大正橋から撮った二つの川。縦に流れるのが木津川、横に流れるのが道頓堀川。右端に、道頓堀川の水門が見える。木津川の近くには、「京セラドーム大阪」もある。



ここを訪ねたのは、写真下の大地震両川口津浪記石碑を見るためだ。案内リーフレットに次のように書かれていた。一津浪碑は木津川に架かる大正橋東詰北側にあります。この石碑が建てられた当初は木津川に橋はなく、石碑は渡し場に建てられていたようです。大正4年(1915)に大正橋が架けられ、石碑は橋の東詰北側に移されました。また、昭和49年(1974)の新大正橋架け替えに伴い、石碑周囲の玉垣が整備されました。また、平成17年(2005)の阪神電鉄西大阪延伸線工事の際には、ケヤキに書かれた碑文の文字が一新され、現在の形に整備されました。石碑が建立されてから約160年、設置場所は幾度かの変遷を経ましたが、石碑は幸町の人々によって保存されてきました。このような事例は、全国でもまれであり、大地震両川口津浪記石碑は大阪の誇るべき文化遺産といえるでしょう。



この津浪記石碑は平成19年(2007)4月6日に大阪市有形文化財に指定された。その指定理由を紹介しておきたい。

安政元年(1854)11月4・5日に発生した地震と、それに伴う津波によって犠牲となった人々の慰霊と、後世への戒めを語り継ぐことを目的として建てられた石碑である。長堀茂左衛門町の森氏が発起し、同町の家中和石碑の建つ幸町の人々が協力して地震発生の翌年、安政2年(1855)に建碑されている。

碑文には、地震の後船に避難した人が津波によって大きな被害を受けたこと、148年前の宝永地震でも同じことがあり、教訓を生かすことができなかつたことが書かれている。そして、年月がたてば伝え聞く人は稀となり、忘れ去られてしまうが、今後はこのようなことがないように、災害を後世に語り継いで欲しいと結んでいる。

記念碑保存運営員会では、毎年地蔵盆にあわせて石碑を洗い、刻まれた文字に墨を入れるのが年中行事となっている。建碑の精神が、150年間受け継がれている意味においても稀有な例である。

(2019年3月17日)